

さいたまここに人あり

# 花の森こども園



よしだ  
葭田あき子 さん

子どもたちにとって、子ども時代を  
どうすごさせようと考えたら「森のよ  
うちえん」にたどり着いたんです。

— 葭田あき子さん

花の森こども園の門をくぐると、元  
気に走り回る子どもたちとヤギのスミ  
しちゃんが迎えてくれました。

(田中友里)

# 手作りブランコのある庭で

西武秩父線皆野駅から、歩いて20分。国道140号線を抜けると、小さな山が見えてきます。山の上方につづく道の入り口に見えるのは、「ムクゲ自然公園」の看板。ムクゲ自然公園は広大な敷地に陶芸館、文芸館や美術館を擁する、民営の自然公園です。名前の由来となった10万本のムクゲをはじめ、山ツツジや彼岸花、ろう梅、秩父紅（福寿草）など、一年を通して多くの草花が来園者を迎えてくれます。この自然豊かな公園のなかには、「花の森こども園」がありました。

「花の森こども園」は、保育士と保護者が一緒になって運営する「森のようちえん」です。

NPO法人花の森こども園代表の葭田あき子さんは「子どもにとって、子ども時代をどう過ごさせようかと考えたなら、『森のようちえん』にたどり着いたんです」と語ります。

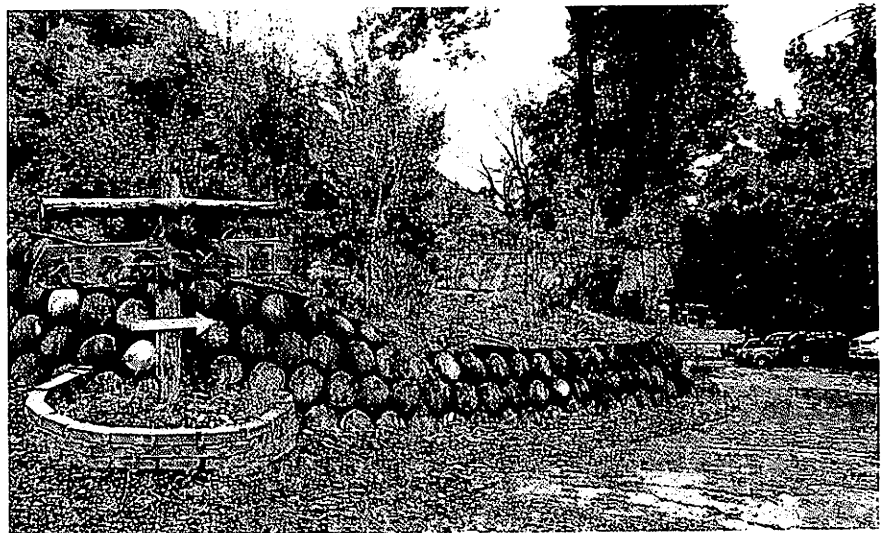
「森のようちえん」とは、「自然豊かな環境で子どもたちを育てたい」という保護者の願いから生まれた、野外型保育で

す。北欧ではじまったとされていますが、現在、ドイツや韓国などで広く取り入れられてきているといいます。日本では、年間をとおして取り組む「ようちえん」は、「花の森こども園」を含めて全国で2カ所ですが、多くの幼稚園や保育園、子育てサークルなどに取り入れられています。

「森のようちえん」といっても、森だけではなく、海や川、畑、自然公園など、広く自然体験の機会を子どもたちに提供する保育スタイルです。

「花の森こども園」の門をくぐると、元気に走り回る子どもたちとヤギのスマレちゃんが迎えてくれました。大きな木から吊るされたロープのブランコは、保護者のお父さんが手作りしてくれたもの。ウサギ小屋、ヤギの小屋も、地域のひとや保護者の手作りです。

この日、子どもたちはバスから降りてきて一番に「いいにおい！」と叫びました。入り口には、キンモクセイが咲いて



います。口々に「いい香り」と口にすると、そんな子どもたちを「すごい」という葭田さん。「いろんな五感を普段から使うように、あまり整備はしない」という園庭。地面からは石もたくさん出ています。

# 異年齢の子どもたちにもたたちに囲まれて

園には、9人の子どもたちと、ヤギ、うさぎやチャボ、そして保育士に、保護者や中学生の子もお手伝いに来ていま



す。

この日、お手伝いに来ていた中学生のアンナちゃんは、不登校ぎみです。いまは、中学校にも認めてもらい、週に1回、「花の森こども園」に通っています。昨年までは、高校を中退した女の子が通っていました。「子どもたちと自然のなかで、いまは仕事をみつけてがんばっています」。

もともと、どうして異年齢の子どもたちを受け入れるようになったのでしょうか。

「開校記念日に、小学生のお兄さん、お姉さんたちが園に来てくれて、一緒に掃除したり、肩車してくれたり、すごくよかったです」。「ちよつと先輩が来てくれる、それが小学生にも園の子どもたちにとってもいいんです」。「刺激的なんだよね」と、保護者の方も言葉を添えます。

こうして、積極的に異年齢の子どもたちを受け入れるようになりました。今年、

NPO法人になったときも、こうした異年齢の教育関係を意識したそうです。

「花の森こども園」は「ようちえん」です。厚生労働省の「保育園」にも、文部科学省の「幼稚園」の基準にも当てはまりません。「子ども9人に対して先生が7人つていうところだけは基準をみたしてるけど、それ以外は全然」「勝手にやってる『ようちえん』」。そういつて葎田さんは笑います。

子ども1人に対して面積ほどのくらい。園庭に砂場とブランコがなければいけない。そのブランコも鉄製でなければダメ。「私たちにとって、お父さんがつくってくれた桜の木にさげたブランコに勝るものはない」と、葎田さんたちは理念を曲げてまで認可を求めないといいます。「お金がないだけなんだけど」といながら、「報告義務もないから、自由にできる。子どもたちと向き合う時間がたっぷりとれるんです」。

「そもそも幼稚園は、こんなにいろんなひとを園に入れたりしませんよね」。「大人になったとき、いろんなひとに出会っても、偏見なく判断してほしい」と話します。

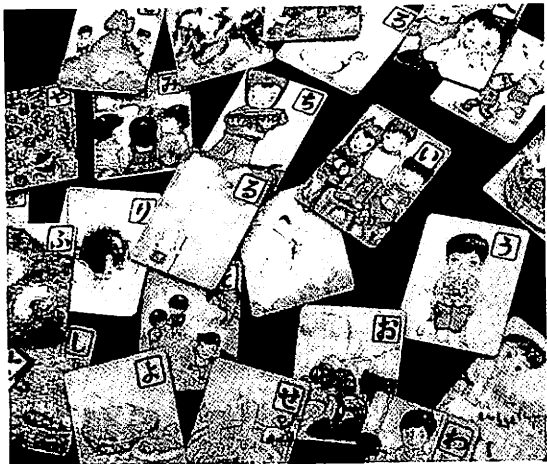
「こっつて、女の子が1人しかいないんです」という元保護者の長谷川さん。小学生のお姉さんが来てくれると、絵を

## 「親の手で育てよう」

蒔田さんは「準備期間が短かったから、できた」といいます。長谷川さんも、「待ったなしかったんですよ」と微笑みます。

「花の森こども園」をつくったのは、同じ幼稚園に通う保護者たち。

2007年10月、蒔田さんたちの子ど



描いたり一緒に遊んだりしてくれたりするのが、その子にとってもうれしい、と顔をほころばせます。

もたちの通う幼稚園の園長先生が変わり、教育方針が大きく変わるといふ「事件」が起きます。それまで、子どもたちをたくさん遊ばせてくれる幼稚園でしたが、新しい園長は英語教育を取り入れ、知育に力を入れはじめます。「経営者が決めたことだから、親が口を出すことじゃない」、評議員会のなかでのこうした発言に、理不尽な思いが募りました。「教育理念に賛同して選んだ幼稚園なのに……」。「納得できない」と感じた蒔田さんたち保護者は、「親の手で育てよう」と、自分たちで幼稚園をつくる決意をします。

「子どもたちが幼稚園に通うなかで保護者自身も育ててもらった」と、蒔田さんはいいます。いま、幼稚園は「子どものことはみますから」と、どんだん親の手を離れています。親が関わることで、子どもの成長を親も一緒に感じる環境を

つくりたいと思いました。「だから、花の森こども園は親の手がかかるつくりになっっているんです」。

どういう幼稚園で子どもたちを育てたのか。お父さん、お母さんたちは議論するなかで、試行錯誤を重ねます。そんなとき、出会ったのが「森のようちえん」の教育方針でした。

「こんなのもあるんだ」「私たちの思いにぴったり」。

こうして08年1月、開園に向けて場所探しが始まりました。

ほいくえんの場所探しが難航しているとき、同じ幼稚園の元保護者のひとりである長谷川さんから、「ムクゲ自然公園」の一角を提供したいという申し出がありました。長谷川さんの家族が所有するこの公園にあるレストラン跡を、園舎として提供してくれるというのです。公園の豊かな自然も、「ほいくえん」にぴったりでした。

当時、中学校の相談員をしていた蒔田さんは、新たにつくるようちえんのために退職を決意。「中学校の先生」が、「ようちえんの先生」になりました。

08年4月、「花の森こども園」の開園式を迎えました。

# 遊びのなかで学んでいる

「ヒヨコの絵を描くー」

「ロボット、描く」

子どもたちがクレヨンを手にも、思い思いの絵を描きはじめました。となりでは、粘土で何かつくっている子どもも。

「これ、何？」——「おだんご」

「ねえねえ、こつちも見て」

みんな、それぞれ虫や動物、お母さん、お父さんなど、描きたいもの、つくりたいものが次から次へ出てきます。どんどこクレヨンの色を変えて、色とりどりに埋め尽くされた厚紙。先生は何もいいません。自分で書きたいものを見つけてくる、それが大事なのだといえます。



## NPO 法人 花の森子ども園

〈教育理念〉

いろんな命との共生

自然の中で自ら伸びる子ども

五感と意感を磨く

花の森子ども園はみんなでつくる、みんなの「ようちえん」です。事業を応援してくれる会員を募集しています。

\*賛助会員 個人一口3000円  
法人一口5000円

会員になってくださった方には、花の森だより（春夏、秋冬の年2回）をお届けします。自然学校、各種企画参加に割引制度があります。

〒369-1412 埼玉県秩父郡皆野町皆野4048-1 ムクゲ自然公園内

TEL0494-62-4545

ホームページ

<http://hanamorien.exblog.jp/>

でも、「自然のなかに放り出すだけじゃダメ」「大人が関わって、そこにつなげる仕かけをつくるんです」。サービスじゃなく、主体的に自然と関わって、自然のなかの一部だと気づいてほしい。それが、先生たちのねがいです。

流しそうめんをしたとき。「かぐや姫はどこ?」、子どもたちが必死に竹を割りました。そうやって割った竹だからこそ、流しそうめんを楽しめる。「すみずみまで主体的に関わるからこそ、子どもたちの心に落ちる」のです。木や竹があ

る環境だから、木を切るところから体験できる。「勉強はしないけれど、実際に見たり触ったり、いろいろな体験ができる」と、長谷川さんもつづけます。「恵まれてますよね」という渡田さんは、「時間があるからできる」という。「学校もそうできたらいいですよね」。



長谷川さん